

FD NEWSLETTER



CONTENTS

- FD充実の秋
- 前期授業アンケート実施報告
- 私の授業づくり
- 今後のFD活動への参考事例
- 駒澤大学FD推進委員会の今後の活動予定

FD充実の秋

秋の授業がスタートしました。これから12月末までに計画されているFD関係の活動についてご案内します。

1. 「学生による授業アンケート」(後期・通年科目)

10月17日(月)から22日(土)までの1週間、非常勤講師の科目も含め全学的に実施されます。今年度は本格的実施の初年度ということで、できるだけ多くの学生がアンケートに参加できるような形をとりましたが、今後もアンケート対象科目の選定や質問項目、実施方法等について、教職員の皆様の意見を反映させてさらなる改善を図っていく予定です。

2. 「公開授業」

FDの大きな目的は、個々の授業の質を高めることを通して、大学全体としての教育の質を高めることにあります。「公開授業」は教員同士が、お互いに協力して授業をよりよいものにしていくシステムです。年内の実施に向けて準備を進めています。

3. 「研修会」

国内や諸外国のFD活動の現状、他大学で実施されている興味深い実践、取り入れたいアイデア、さらにはFD活動における問題点や困難について学ぶ格好の機会です。今年度は11月7日(月)に行います。

前期授業アンケート実施報告

今年度の前期授業アンケートは、下記の要領により非常勤教員を含めた全教員を対象に実施した。

1. 実施期間(前期終了科目): 平成17年7月1日～7月7日
2. 対象科目の選定方法
担当科目のうち受講者数の多い科目から、専任教員2科目、非常勤教員1科目。
3. アンケート用紙の種類
講義科目 実験・実習科目 語学科目 保健体育実技科目
4. 対象科目数および対象学生数 115科目 9,501人(延べ人数)
5. 実施科目数および回答数 115科目(100%) 6,851人(72.1%)

授業アンケート実施

後期・通年科目対象

実施期間

10月17日(月)～10月22日(土)

私の授業づくり

梵語マスターへの道

仏教学部 金沢 篤教授

サンスクリット（梵語）の授業を担当するようになってからかなりになるが、「授業づくり」ということで深刻に悩んだことはない。自分の辿って来た道を思い浮かべるだけでよかった。外国語といっても、文語であり古典語である点が大き。一週一駒九分の真剣勝負で、梵語マスターになれると考える学生はいないからである。語学習得の基本は反復修習に基づく想記憶力の鍛錬である。梵語マスターの愉悦を励みにしての、昔ながらの宅勉が不可欠である。梵語マスターの使命、変幻自在の敵スト（テキスト）とどんな風に戦うことになるのかを早くから自覚させなければならない。換言するならば、文語でありインドの古典語である梵語と相渉るとはいかなることか、その風景の中に学生を立たしめて、そこで作業内容を身を以て的確に覚え込ませることが肝要である。梵語敵ストは、奇妙な文字に乗ってやってくる。そのモジュールについても学が必要がある。だが、文字に習熟するには殊の外時間がかかる為、その作業は宅勉後回し。梵語敵スト見参の前に、討ち死にしてしまう危険性が大きいからである。初心者は、便利無上の荘厳表音ローマ字で来襲する梵語敵ストの正体を見定めてこれと直ちに涉り合う。戦さ場で敵ストの息の根を止める為には、これをして、これをして、そしてこれをする。その為の武器にはこれがあり、これがあり、そしてこれがあることを教え込む。授業では、梵語マスターになる為の努力の方向付けを与えることに尽きる。梵語変幻技の基本は連声と曲用と活用。あとはパダワン個々人がどれだけその技の修練に打ち込むかである。また、宅勉模擬戦の有効妥当性の検証の場が、授業であるとも言える。常時襲来する練習敵ストと選文敵ストが果たして打倒できたかどうかをチェックするのは、やはり教師の務め。「それでは敵ストは斬れてな〜い」との公然駄目出しで、奮起できるパダワンだけが、マスターへの道を歩き続ける。実のところ、授業を通じて適うのはそこまで、あとには敵ストを産み出した古代インドの万能マスターたちとの熾烈な脳力合戦が待っているのである。

「宇宙科学」授業奮戦中

文学部自然科学教室 篠原 正雄教授

文系の学生に自然科学を講義する私の悪戦苦闘ぶりを教養科目の「宇宙科学」を例に述べてみよう。

受講生のほとんどは高校で地学をとっていない。予備知識は中学の理科であり、ほぼ「太陽系」に限られる。一方、彼等は様々なメディアを通して得た雑多な情報から宇宙のイメージを作り出している。彼等の興味は宇宙の起源、星の生と死、ブラックホールなど太陽系の遥か彼方に及ぶ。実質的に高校にはない科目ということで興味をもたれるのだろうか、受講希望はかなり多い。

そんな彼等に現代の宇宙像を伝えようとするとき感じる問題が2つある。

第一は、宇宙を語るには物理が必須ということである。物理や数学を苦手とする学生にいきなり教えるか、例え話からシミュレーションソフトまでいろいろと試してきた。「何千光年も先の星の材料がなぜわかるのか？」とよく質問される。これは天体観測の要の問題である。楽器と音にたとえながら原子構造と光の関係を説明し、身近なものから天体に至る様々な対象のスペクトルの画像を見せる。「よくわかった」と「物理的すぎて難しかった」という感想が半々である。万人を納得させるのは難しい。

第二は、受講生の多くは宇宙科学の対象となる天体になじみがないということである。星雲、星団、銀河の確かなイメージをもっていない。そこで画像を多用することになる。ところがその使い方が難しい。映像を使うと学生は「わかりやすかった」と答えるのだが、小テストで確認をするとわかった「つもり」になっているだけで、理解していないこともある。立ち止まって考える場面無しにただ流れていくビデオ映像等にその傾向が強い。基本的には講義の流れの中で、重要な点を指摘しながらじっくりと画像を見せるのが良いようである。

どのような使い方がよいのか、アンケートや小テストなどで確認しながらフィードバックしてきた。ところがここ数年、その作業が困難になってきている。

「宇宙科学」が事前登録からはずされた年から大人数になってしまい、教場が制限されてPCが使えないなど画像を効率良く使えなくなってしまった。プリントの配付もままなら

ず、確認テストも難しい。唯一の希望は、来年度より事前登録の対象に戻してもらえることである。

考えて書かせる双方向型講義の試み

経済学部 中濟 光昭助教授

高等教育の大衆化及び少子化による中堅大学の易化の影響が、「文章が読めない・書けない」「論理的思考ができない」「資料を集め、分析する方法がわからない」といった学生が多数を占めるようになったように思われる。これらの力を養成するには、資料を集めさせ、文章をたくさん書かせ、論理的な文章になっているかを添削する指導が必要であろう。しかし、受講者数が百人を超える講義が多いという経済学部固有の問題からこのような指導は困難である。これらの問題に対応し、学生の能力を高めるため、ITを活用した講義を試行してきた。双方向性や情報共有により数百人の講義でもマンツーマンに近い効果を与えられないかと考えた。ここでは、講義にITを活用した事例とその課題について述べたい。

講義の進め方は次の通りである。パソコンが完備している1-201教場を利用し、1) 予め制作した講義パッケージ(デジタル版講義ノート)をパソコンで再生しその画面を前面スクリーンに投射して講義トピックスを概説する。2) 教員により提示された課題についてインターネットから情報を検索し、それをもとに考察した後、電子掲示板(注1)に解答を書き込む。3) 教員からの課題や講義テーマに対する質問は、メーリングリスト(注2)でフォローする。また、インターネット上でサービスしている株取引シミュレーションを活用し電子商取引を擬似体験させている。4) レポート提出、アンケートなどを適宜実施し、理解度や講義に対する満足度を把握する。5) レポート提出等の定期的な評価に加え、電子掲示板上の発言や議論なども成績として評価する。この方法から期待される効果は、1)によりマルチメディアを活用した講義ノートから講義内容をワープロにコピーし加筆して各自のノートを作成するため、ノートをとる時間が少なく、話しに集中しやすい。2)、3)、5)により、問題発見・解決型講義の実践が可能となる。擬似的な電子商取引の実践や電子掲示板やメーリングリストといった情報共有ツールにより、受講生と教員、受講生間のやり取りが講義時間はもちろん講義外の時間でも

可能となり、単に講義を聞くのではなく、持続的に思考を深め、問題を発見・解決させることができる。などである。もちろんいいことばかりではなく問題も多々あった。1)について、当初は板書せず資料提示し説明したため、話自体が早くて内容がわからない、自分のノートに加筆しようにもタイプが追いつかないといったクレームがあった。現在は、時間調整と大事なところを強調するため、フリーの板書ソフトを使って、画面上の資料にキーワードなどを書き込みながら説明している。しかし、お絵かきソフトの操作性が悪く字が汚くなりがちな点、改善が必要である。3)のメーリングリストや掲示板、インターネットのサービスについて、講義中に課題を書き込ませる場合、受講者のタイプ速度によっては解答が中途半端になってしまう。これについては、提出期限に猶予を持たせるようにして、じっくり解答できるように配慮している。メーリングリストや掲示板、インターネットのサービスについて、登録ミスで課題を提出できない学生がみられた。今年からはTAの活用により、きめ細かい指導が可能となったので、登録ミスは少なくなっている。教員側の課題としては、講義時間内に課題へのコメントを十分行えないため、かなりの時間を割いて講義外にコメントをすることになる。担当している講義の平均出席者数は120人程度であるが、書き込まれた個々の解答にコメントすることは時間的に難しい。現在は解答のパターンをいくつかに分類し、メーリングリストにて一括してコメントしている。解答の内容は遅々とはあるがよくなっており、また私語もなく課題に取り組む学生の姿から、この方法に効果を感じている。もちろん個々の解答にコメントしたほうが教育効果が高いと思われるので、質問や解答に対し、既にあるコメントを流用し、効率よくコメントできるデータベースの整備が直近の課題である。個々の学生と相対して質疑応答することの教育効果は疑いようがないが、ITの活用による質疑応答等は不完全ながらも直接相対の指導を補完する手段として意味をもつといえよう。

(注1)電子掲示板: 第三者へ知らせたいメッセージを書き込むことができる、Webサイトやグループウェア内にある伝言板、またはそれを実現するシステム、サービスのこと。BBS、ブリテンボードともいう。電子メールと違い、1対1ではなく、多数の人に向けてメッセージや情報を伝えることに適している。あるユーザーが掲示板にメッセージの書き込みを行うと、ほかのユーザー(複数)

はこれを読むことができ、読んだユーザーの中である1人がこれに返信を行うと、それもほかのユーザーが閲覧できるようになっている。この繰り返しによって、複数のユーザー間で相互に意見交換を行うことが可能となる。リアルタイムのやり取りには参加できなかったユーザーも、過去の発言を読み進むことによって、議論の過程を知ることができる点もメリットである。

(注2)メーリングリスト：電子メールを使って、特定のテーマについての情報を特定のユーザの間で交換するシステム。複数のユーザを1つのグループとしてメールサーバに登録し、情報を同時配信することにより実現している。電子掲示板に似ているが、情報をメールによって配信する点とメンバー以外は購読できない点異なる。

エデュテナー

法学部 西 修教授

「さあ、今日も元気で明るく、そしてためになる授業をしましょう。」これが私の授業での第一声である。

私は、授業作りの柱として次の3点を設定している。

- (1) いかにか知的関心を呼び起こすか。
- (2) いかにか知的刺激を与え続けるか。
- (3) いかにか知的満足感をもたせるか。

私は、大勢の学生を前に長時間講義をする教師には、このほか話術が要求されるのではないかと考えている。中身もちろん重要であるが、いかにか学生を長時間、引きつけるかは、結局のところ話し方の巧拙が作用するのではなからうか。その意味で私は、教師たるもの、エデュテナー(エデュケーターとエンターテナーの合成語)を目指すべきだと思う(かくいう私自身は、いまだエデュテナーとはほど遠いのだが)。

本日の授業はどんな意味をもっているのか、学生の知的関心を引きだし、ときどきユーモアを入れながら、知的刺激を与え続け、最終的に知的満足感をいだかせてフィニッシュを飾るような授業作り、これが私の目標である。「言うは易く、行うは難し。」毎時間、この連続ではある。

武器として、パワーポイント、ビデオ、書画カメラ、インターネットによる外部情報の取り込みなどが有効である。これらをうまく活用するかどうかで、学生の反応もずいぶん違ったものになるように思われる。

私の授業の最後は、残り5分程度をショート落語(私の芸名は、またも家楽大)で締めくくるようにしている。このショート落語で、私なりのギャグを発しているが、若干の当たりはずれがある。なかには「先生のギャグはオサムいです。」という学生がいる。私は、めげずにこう言い返している。「私のギャグは、オサムくていいのだ。なぜって、私の名前は、ニシ・オサム。」おあとがよろしいようで。

悩ましきもの、それは.....

経営学部 明石 博行教授

本学で講義とゼミを担当するようになってから17年。この間、やり方も内容も何度か変え、それなりに工夫し続けてきた。だが、努力にも限界がある。教育だけにかぎったとしても、あまりにも多くのことに悩み苦しみながら、格闘する日々が続いている。

本学において悩ましきもの、それは施設の貧しさである。ゼミのたびに机を並べ替えてまた戻す、こうしたシシュフォス労働をいまだに強いられる。禅研のゼミ教場も、あまりにも狭いため、人数が多くなると身動きできない。4年次ゼミでパソコン教場を使えるかどうかは、授業開始後にしかわからない。一昨年までは、大教場でパワーポイントを使うことすらできなかった。昨年は、受講生を収容しきれないので教場を変更しようとしたが、変更可能な教室がなく、やむなく学生に我慢させた。.....。続けるのはもうやめよう。

悩ましきもの、それは本学の大人数教育である。昨年度のフレックスAの講義には、500名ほどの受講生がいた。今年度のフレAの必修授業には2コマに分けて570名ほど(これでも以前よりかなり少なくなった)フレBの講義には100名強の学生がいる。これだけの大人数を相手にすると、講義プリントとパソコン資料を作成し準備するだけでも、その負担は並大抵ではない。レポートを課したり、試験を2度実施したりすると、採点の負担もきわめて重い。こうした負担を負い、学内の委員会活動などをこなしながら、学外でも社会的責任を果たし、水準の高い研究成果を出さなければならない。骨身をけずって努力してはきた。しかし、.....。できる人があるならば、その人は超人であろう。

悩ましきもの、それは.....。書きたいことはいくらでもあ

る。悩む材料には事欠かない。だが、本学教員としてもっとも悩ましいこと、それは学生に対して申し訳ないという思いをたえず強いられることである。紹介に値するわたしのFD活動もなくはなからう。けれども、それらの紹介よりはるかに大事なことがある。それは、本学のFD活動の喫緊の課題が貧困な教育条件の早急な改善にあることを認識し対処していただくこと、これである。

授業あれこれ

医療健康科学部 西尾 誠示助教授

私の講義は放射線画像を中心に構成しているので、スライドを扱うことが多い。そのため板書する機会は少なく、ほとんどPower Pointに頼っているのが現状である。資料は医療画像をスキャナーで取り込み、空きスペースに簡単な文章を加えて作成する。そのスライドはその日の講義の概略から始まり、画像の意義、実際の技術、画像評価へと進み、毎回60~80枚を要する。この作業を行なうと資料作成と同時に講義の構成が頭に刻まれる。

こうした準備を経て講義に入るが、誠意を込めた力作に学生が必ずしも反応してくれる訳ではない。大方の学生が画面を注視しているが、眺めているだけの顔もある。これは話し方や内容にも問題があるかも知れないが、ノートを取らないことも一因である。スライドが多すぎるかも知れない。そのため講義はその場で理解できても、手から頭に記憶されないのが漠然とした印象しか残らない。内容が記憶されない。スライドの使用方法を再考したい。

現在はPower Pointに加え、プリント資料でB4を2枚配布している。それで重要なポイントにはコメントを書かせ、ノート代わりにさせている。更に授業の終りには学生の理解度を確認するために、その日の重要事項を必ず質問をするようにしている。予習復習をしないのであれば、せめて授業時間だけでも集中して欲しいからである。時々には息抜きも必要かと思ひ、所々で医療現場・学会の話や写真などで関心を引く工夫もしている。

授業中に限らず、自らこの学部を選んだとは思えない学生が一部に見られる。国家資格と生活の安定さを求めて、適性も考えずにこの学部を選んだのだろうか。意欲が感じられな

い学生に共通しているのは、自分の将来像どころか、当面必要な国家試験にすら関心が薄いことだ。比較的目標が明確な本学部ですら、こういう学生が在籍している。現在は大学全入時代だ。大学として受け容れた以上、どんな学生に対しても授業に正面から向かせ、学習意欲を持たせる工夫をしなければならない。講義の内容も重要だが、「面白さ」も必要だろう。今や学生を授業に集中させる技法も問われる時代になってきてしまった。

アンケートと映像の活用

外国語部 川股 陽太郎教授

「井の中の蛙、大海を知らず」、客員研究員としてケンブリッジ大学のコレッジで最初に一年を過ごしたのは四十代の始めでした。その折り冒頭の言葉を痛切に再認識しました。学問研究に配慮したその環境、教員学生の学問研究にたいする真摯な姿勢に感心すると同時に、大いに参考になりました。

コレッジの日本人大学院生に、「日本の大学と一番違うと思う点は」と訊ねると、「払った分がそれ以上をきっちり返してくれる」というのが彼の返事でした。要するに「満足度」の問題です。いままさに日本の教育の場で問われている問題点です。

1982年の帰国以来、講義授業内容等に関し30年近く学生のアンケート(無記名)を取り、授業講義の改善に役立てています。

「百聞は一見にしかず」、二度の在外研究二年間の滞在中に折りを見て、イングランド、スコットランド、ウェールズ、コンウォール、アイルランド、それにヨーロッパ(現在のイギリス人の祖先の地(ケルト人、アングロサクソン人、ジュツ人、バイキング、ノルマン人等と関連のある地)を訪れ、写真、ビデオ等の資料を収集し、それを必要に応じ講義授業で用いるようにしています。

現在のイギリス(人種、言語、風俗習慣)を説明するさい、折りにふれ映像を用いますが、「実感を伴いわかりやすく興味が増す」という答えがアンケートに表れます。

例えば、いかにイギリス人がリサイクルの名人であるか、廃墟となった修道院(激震をもたらしたヘンリ-八世とクロムウェルを語るさいのおまけですが)とその近くのヴィレッ

コテッジの家々の外壁（フリント）を見れば、一目瞭然です。これは太古の海に生息した巨大な^{スポンジ}海綿のセラミック化した化石で、最高の硬度と光沢を併せ持つ贅沢な素材です。

ストーンヘンジの巨石（ウェ - ルズ産）が自然石でなく加工され入れ子になっていることはあまり知られておらず、内側の^{ブルーストーン}柱状列石（ケズウィック産）はその存在すらほとんど知られておりません。ケズウィックの美しいブル - ストンの家々とその前庭（イングリッシュガーデン）は、「家と庭」を愛するイギリス人気質理解の一助となるでしょう。



ストーンヘンジの加工された石



ブルーストーンの家とイングリッシュガーデン

健康スポーツ種目、ジョギング（Jogging）

保健体育部 佐藤 政之教授

毎年、前期（2クラス）、後期（2クラス）のジョギングを朝9時より、この種目を選択せざるを得なかった学生と、玉川ランドの新装なった全天候陸上トラックにて（Exercise Walking and Jogging）汗を流している。

健康スポーツ種目は、月曜日の1時限を例に挙げれば、必修科目の約500名学生に、10名の教員が大学にある運動施設

をフル活用して対応している。学生は前、後期にあわせて2種目を選択させるが、やはり、希望種目は球技に人気が集まり、ジョギングは、「きつい」、「つらい」、「汗まみれ」が前面に出て、第1希望の積極的な数名を除き、他種目定員オーバーのため、やむなし組がまわってきて人数的に何とか成立することになったしだいです。不人気の種目ではあるが、多摩川沿いの素晴らしい環境と、最先端技術を駆使したオールウエザーのトラックで実技ができるという恵まれた条件とベテラン指導者の意欲に期待していただく。

半期10～12時間の実技のなかで、特に最初の講義は学生の興味をいっしょに引き込む大事な場面と考え、ジョギングすることの意義と効果を少しオーバーに解説し、こちらのペースにまき込んでいく。運動が健康維持・増進に役立っていること、生活習慣病の発生及び老化の促進要因となる呼吸循環系の機能低下予防になることや、運動不足が人体に及ぼす悪影響が、骨代謝、筋肉の萎縮が現れ、しだいに“無理のきかない”虚弱なからだになってしまうことを伝え、ジョガー（ジョギングする人）が動作を繰り返して行くと、たくさんの酸素を消費する。すなわち酸素を消費しないと、動作を長く継続できなくなるなど各人の健康度をより高いレベルに引き上げるといった積極的な機能も有している事を力説。

〔ジョギングの指導ポイントと注意点〕

学生は競争を嫌う、タイムで競わない。

ウォームアップとクールダウンの実施と理解。

ウォーキング動作からランニング運動（ジョギング）へと滑らかな重心移動を心掛ける。

脚部（特に大腿部）の連続収縮運動は血液を全身に送り出す、第二の心臓なり鍛えよう。

リラックスした姿勢から、ゆとりのフォームを学ばせる。

リズムカルな走りと余裕の呼吸法（呼吸の換気を各自で意識）

ジョギングの平均ペースは、150m / 分で実施。

心拍数の測定は、走った直後、15秒間の脈拍を計り、それを4倍し、さらに10拍をプラスする方法。

学生自身で運動強度を判定する、「ボルグのスケール」にて自覚的運動強度判定する。例として20歳代の理想の運動心拍数が、130～158拍となるような強度のものでは、主観的には「ややきつい」から「きつい」に相当する運動だと云

うことになる。

運動時間と休息时间(水分補給)には常に余裕をもたせる。今年も、各自にあった走りの指導とホメとヤルキを起こさせるアドバイスで若者とともに楽しく、充実した時間が過ぎせる事を願っている。

文学の授業へのIT活用

短期大学部英文科 湯浅 陽子教授

短大英文科には、「作品作家研究」と「英米文学講読」という選択必修科目(1・2年次開講)がある。その名が示すとおり、これは本来ITなど無縁の科目であろう。少なくとも私以外の先生は、一般教場で授業されており、暫く私もそうだった。だが、現在は敢えてPC教場を使って授業し、一定の効果を上げている。ここに至るまでには3段階の授業スタイルを経ている。

私は一般教場使用の時から、授業スタイルは「講義形式」ではなく、学生による「発表」を主体にした全員参加型の授業を展開してきた。そのやり方は次の要領で行い、基本的には現在も変わらない。

第1回目の授業時に受講希望者名簿を作り、それを基に4~5名のグループ分けを行う。発表は必ずしもグループワークではないが、グループに分けておくと、互いに連絡をとってくれるので都合が良い場合が多い。発表はそのグループに対して、テキストの「何ページから何ページの発表をお願いします」と少なくとも発表予定日の2週間前に告げておく。グループはそれを受けて、グループ内で自分たちの分担をし、授業に臨む。もし、当日発表にもかかわらず欠席した場合は、「連帯責任だから他のメンバーにその分が回る」と告げがあるので、学生はめったなことでは休めない。

さて、予定しているその日の発表グループの全員が座席から離れ、教壇上に並べてある椅子に座ってシンポジウムの雰囲気よろしく、分担順にマイク片手に発表を行い、非発表者はそれを聴き、自分の予習に加えて更にその作品の理解を深める、そこまでは、一般教場でも可能であった。ただ、この形式の場合、どうしても日本語訳中心の発表になりがちで、発表者の存在意義が希薄に思われた。

そこで、次にOHPが使える教場を希望し、発表者は、自

分の調べてきたことをスクリーンに映し出して発表するという授業に切り替えた。発表者には発表の重心を日本語訳ではなく、自分が辞書を使って調べた単語の発音、意味、語源、派生語、その他、構文の文法的解釈とその部分の内容概略等々、とにかく自分の調べたことに置いて発表するよう要求した。

OHP使用による発表で、発表内容が以前と比べて質的に高いものになったが、学生は、自分の発表が果たして適切なものだったのかどうか知る必要があると感じた。加えて非発表者の授業参加を促す方策も必要であったので、「出席および発表コメント表」を用意し、各発表者の発表直後に記入させることにした。回収して出席と、コメントに現れる各学生の授業態度をチェックしたあと裁断し、それぞれの発表者ごとにまとめて次回の授業時に発表者に渡すという方法でフィードバックを行った。この作業は Semester 制の授業(週2回)では、終わったらすぐに済ませないと次回に間に合わず、受講者数も90名ほどいたので、毎週非常に忙しかった。

受講者数が幸いにも少なくなったお陰で、PC教場を使用できる環境が整い、今年度前期の作品作家研究は理想どおりの授業が展開できたと喜んでいる。「出席および発表コメント表」は共有ドライブに置いておき、学生はそれをコピーして自分の学生番号名で保存して必要事項を書き込む。私は授業終了時にそれをMOディスクで持ち帰り発表者ごとにまとめる。何よりも嬉しいのは、発表者へのフィードバックの方法が、これまでの用紙の裁断・振り分け・綴じ込みという肉体労働から解放され、ファイル上で行えるようになったことである。学生にとっても、授業時にコンピュータ操作をしなければならないという必要性から自然にコンピュータに慣れ親しむことができる上、皆の前でOHC(書画カメラ)を使用して発表しなければならないという機会が「大変だけれど面白かった」「良い経験になった」と講評しているように、結構彼女らの言う「プレゼン」は楽しく、今後大いに役立つものとなったようだ。





今後の F D 活動への参考事例

短大英文科「学生による授業評価」の 10 年

短期大学英文科 高野 秀夫教授

短大英文科は「学生による授業評価」を平成 6 年度から始めた。その平成 6 年度は英文科にとってカリキュラム改革の年で、従来どおりの英米文学、英語学を主体とする一類のコースと英語運用能力向上を目指す二類のコースとに分けた。必修科目にはそれぞれのコースの軸となる科目を設けた。一類コースの必修科目には、英米文学、英語学関係科目（英米文学概論、英文学史、英文講読、英語音声学、英文法論、英語学概論）があり、二類コースの必修科目には実用英語科目（Intensive English I-□, Public Speaking, Reading and Comprehending）があり、さらに一類、二類共通科目にオフィス・ビジネス実務、コンピュータ関係の科目がある。グローバル化の時代に応えるため、経験豊かな英語のネイティブ・スピーカーによる授業で、日常英語会話に役立つ生の英語を学修し、社会における即戦力としてすぐに役立つオフィス・ビジネス実務、コンピュータ能力を修得し、国際人としての教養を身に付けた人材育成を目指した。

その英文科のカリキュラム改革に伴った「学生による授業評価」は、専任、非常勤教員が開講している 81 コマを、現在行っている 5 段階評価で実施した。非常勤教員には、学年末に評価結果を一覧表にし、コメントを付して、次年度の授業に役立つように通知した。全科目の平均値が 3.64 であった。平成 7 年度は 3.84 で、0.2 ポイント上がった。

実用英語科目が主軸の二類は、英語のネイティブ・スピーカー専任教員が担当し、非常勤の英語のネイティブ・スピーカー教員とで必修科目 Intensive English の充実を図った。平成 8 年度の全学的な新カリキュラムの実施では、Intensive English I に と を加えた。

平成 12 年度に、再度、カリキュラム改革を断行した。語学の修得は、短期集中的に学習の方が効果的である。その為、 Semester 制の実施に踏み切った。週 1 回の英語の授業より週 2 回の授業のほうが、教師と学生との親しみの度合いが増す。親しい関係が言葉の学習には適しているからである。Intensive English I に と を加え、非常勤の英語ネ

イティブ・スピーカー教員のさらなる充実を図った。コンピュータ教育の一層の充実、短期留学英語セミナーおよび資格検定等を卒業単位に認定、さらに 4 年制大学編入のための科目充実を目指した。

平成 7 年度から横ばい状態が続いていた「学生による授業評価」の数値が、平成 12 年度の Semester 制導入から目覚ましい上昇を示し始めた。平成 12 年度 3.96、平成 13 年度 4.03、この 2,3 年は 4.1~4.2 の間を推移している。平成 6 年度「学生による授業評価」の 3.64 の数値が、現在 4.1~4.2 に至る成果は、「学生による授業評価」実施と Semester 制度導入が、その大きな要因と言えよう。

10 年に及ぶ短大英文科の「学生による授業評価」は、総ての科目を一律に 5 段階評価で出して、数値の最も高い科目から最も低い科目までを一覧表にしてきた。また科目別評価等の数値も一覧表にしてきた。各教員の個人差はあるが、全体的に、実用英語、オフィス・ビジネス実務など、いわゆる主に Skills（技）を教える関係科目の評点は高い、次に英語学関係、そして英米文学関係の順になった。この順位が逆転することはなかった。表面的な事象に振りまわされずに、いろいろな出来事や人生を深く考えることが大切な科目で、高得点を取るのは大変である。短期大学は 2 年間という制約があり、その性格上、どうしても 4 年制大学と同じアプローチはできない。学生は 2 年目にはもう就職活動をしなければならぬ。学生にとって、2 年間はかけがいのない大切な時間である。目に見えてすぐに結果が出て、分かりやすく、役立つ授業を求めるのは当然のことである。学生の要求にしっかり応えた、厳しい授業の評価は高い。新しい時代の英語教育の大切さを知り、学生が何を求めているのかが分かる、授業の実現には「学生による授業評価」は欠かせない。基本的には教える者と教えられる者との信頼関係を築き上げ、heart-to-heart communication のより良い授業を目指していくことが大切である。

毎年、新旧の学生の移動がある。学生は新しい時代の息吹を大学のキャンパスに吹き込んでくる。嫌でも教える者は、敏感にその変化を捉えて行かなければならない。現代の高度情報化時代の到来は、ともすると益々希薄な人間関係をもたらしかねない。それゆえ、新しい時代の流れに呑み込まれることなく、時代思潮に即応した教育体制の確立は急務である。

短大英文科は10年間の長期に渡って独自の「学生による授業評価」を実施してきた。今後は、現行の全学の「学生による授業評価」で、いままで積み上げてきた知識、経験を活かし、より良い教育を目指すことが大切であると思っている。

法科大学院における授業評価と授業改善

法科大学院・法学部 日笠 完治教授

はじめに

法科大学院は、2004年4月に開設され1年半、すでに3セメスターにわたって授業評価と授業改善の諸方策を試みている。実際どのような試みが行われているか、また、いかなる展望をもつべきか。全学的に行われるFDに多少なりとも役立つヒントがあればと思い、法科大学院の公式な見解とは関係のない一教員としての愚見を供する。

法科大学院の特徴

法科大学院は、「高度で専門的な職業能力を持った実務家の養成に特化した教育」を行う専門職大学院として、2004年度から始動した。原則的には3年間（既修者コース2年間）の法曹教育を受け、法科大学院修了（法務博士）をもって、裁判官・検事・弁護士という法曹になるための司法試験「受験資格」を獲得する。かなり高率の合格が保証されるだけに、その制度目的から教員スタッフに弁護士多数が加わり、授業科目も実践的なものが多い。そして、その実態を第三者評価機関が客観的に評価する。評価によっては、法科大学院の存続や発展が左右される。

学生は、高額の授業料を払い、社会的地位とキャリアをひととき捨て、使命感と向学心に燃えて入学する。その能力は高い。教職員も法科大学院の目的を共有するため、学生への貢献が求められ、常に緊張を強いられる。

授業公開の原則 自主アンケート・教員相互の授業参観・非常勤の科目も授業参観

授業は、具体的な「社会的正義」を探求する実践的なもので、かつ、学生、教員、社会から客観的に評価されることが必要不可欠である。そのためには、授業は「公開」が原則となる。他の教員・受講者外の学生・第三者評価機関の目に曝されるべきである。公開は、概して教員には抵抗が強い。常に最高度で正確な知識と回転の早い柔軟な対応の準備を必要



法科大学院 模擬法廷

とするからである。

だが、学生の能力や進歩の状況は無視できない。授業は教員と学生のコラボレーションであるからである。そこで、法科大学院では、授業開始から2ヶ月内に無記名の自主アンケートを担当教員が取ることになっている。学生の意向を把握し授業方法を微調整ないし改善するためである。

また、学問分野ごとにFD部会があり、同じ部会所属の複数の教員が、授業日程の中盤以降に相互に授業参観して意見を述べ検討する。専門家からの意見は、また担当者の気づかない点を指摘し有意義である。研究科長や専攻主任の見学もあり、非常勤講師の授業もすべて参観される。法科大学院が「一体としての授業」を学生に提供しているという考えに基づく。

学生と教員の相互理解の原則 担任制・オフィス・アワー・意見を聞く会

学生と教員の意思疎通は、担任制によってまず確保する。1人の教員は、1学年3人から5人の学生の担任になる。さらに、事務職員を通しての情報交換も活発に行われている。担任制は、有効であるが、運用によっては問題を醸成することもあるので注意が必要である。

また、各教員は、オフィス・アワーを前後期それぞれ2講時分設定しており、授業の質問を受けるだけでなく、さまざまな話し合いが学生と行われる。

さらに、授業の後半には、学年別担当のFD委員と事務員が、自由参加で学年全体の意見を聴取する会を開く。そこでは、説明や反論することなく聴き取ることに努める。それを、教授会（FD全体会）で報告し検討する。意見を統一した上で、各教員から学生に説明する。

学生と教員の相互理解は、あらゆるチャンネルを活用して

行われなければならない。情報の流通が阻害されたり、歪曲されたりすれば、相互不信に陥り非効率で暗い教育現場となるからである。

学生の授業評価と教員の対応について 授業アンケート・教員の応答と公表

そして、授業終了の1・2週間前に、学生による授業評価を無記名アンケートで行う。項目ごとに点数化して、教員、科目、学年別に集計・分析し、さらにセメスターの全体評価を行う。なお、自由記載回答欄では、良い点と改善点の併記を求めている。数値化の欠点を補うため具体性を担保する必要があるからである。なお、教員へのアンケート結果の開示は、成績表を提出した後になる。

これらの過程を通して、教員は、学生への質問に応え、反省し、来年度への改善点と抱負を冊子にまとめ、学年末に公表している。確かに、全体としての授業改善は次年度になるが、上記のFDの過程において、当該年度にできる最大限の努力は行われているのである。

大学は誰のもの パラダイム転換の必要性 志の高い学生と心優しい優秀な教職員

同年齢層の約20～40%の子供が大学に進学する「マス大学」段階でも、教員は研究とその成果の教授で任務を終えたことにはならない。大学は、既に保護者の意向や社会の要望を担う社会的存在である。ところが今や、約50%を超えそうな誰でも大学に入れる「ユニバーサル大学」の段階に到達する。

研究者は、従来の伝統的なパラダイムに固執して、研究と教授に専念したいであろう。しかし、時代はそれを許さない。大学は、研究者だけのものではなく、学生、保護者、卒業生、社会、国家、国際社会などのものとなった。それに応える授業は、従来のものとは全く異なる。甘ったるい手抜きは、学問ではない。可能な限り高度で実践的な授業を模索していく方法やシステムの開発は、法科大学院でも学部でも共通するところではないであろうか。

そして、最後に強調したいのは、学生、職員、教員の心の問題である。教員だけでなく、職員もそして学生も従来の陋習を改めなくてはならない。心のあり方が大学のあり方に大いに反映する。それぞれの努力を結集して、愛する駒澤大学の新たな形が創造されることを期待する。



駒澤大学FD推進委員会の今後の活動予定

平成17年度「学生による授業アンケート」

実施スケジュール

後期 平成17年10月17日(月)～10月22日(土)

研修会 平成17年11月7日(月)

講師：安岡高志東海大学教授

公開授業 平成17年度中にFD推進委員会の企画により実施予定

平成17年度 FD NEWSLETTER 発行予定日

第5号 平成17年12月10日

第6号 平成18年3月31日

編集後記

授業アンケートも2年目を迎えた。実施方法等、前年度からかなり変化したこともあって、FD推進委員会には様々なご意見が寄せられているが、今回は前期終了科目のみの実施でもあり、総合的な分析・反省は、全アンケート日程終了後に本紙面でも行なわれることになる。

さて、このアンケートを除けば、夏休みもはさみ行事の少ない時期であったため、今回の紙面は結果的に各学部の先生方から寄せられた特集記事を中心としたものになった。珠玉の知恵や指針のみならず、中には涙あり笑いあり、読み物としてじっくり読んで楽しんでいただけないかと思う。ご多忙中、素敵な文章を寄せていただいた各先生方に心より感謝申し上げます。(岩崎・高橋)

OCT.2005 FD NEWSLETTER 第4号

発行日：平成17年10月6日

発行者：駒澤大学FD推進委員会

〒154-8525 東京都世田谷区駒沢 1-23-1

TEL 03-3418-9867 FAX 03-3418-9037

(事務局：総合企画室)